

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：33908

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24730184

研究課題名(和文) アメリカにおける現代オーストリア学派の史的発展に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the History of Modern Austrian School in America

研究代表者

吉野 裕介 (Yoshino, Yusuke)

中京大学・経済学部・講師

研究者番号：00611302

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究計画の目的は、二十世紀の代表的な自由主義思想家フリードリッヒ・ハイエクの学説を歴史的に考察したうえで、それをアメリカのオーストリア学派における発展史に位置付けることにあった。研究期間中のもっとも顕著な成果は、2014年3月に単著『ハイエクの経済思想：自由な社会の未来像』(勁草書房)を刊行したことである。一連の考察を通じて、オーストリア学派におけるハイエク思想の位置付けを規定し、あたらしい自由な社会像を構想することができた。結果として、本研究計画は当初の予想以上の研究成果を得られたと考えている。

研究成果の概要(英文)：This project aims to consider F.A. Hayek's economic thought and then to the history of the development of modern Austrian schools in the twentieth century. One of the most significant achievements of this project was the publication of my first book F.A. Hayek's economic thought: the future image of liberal society in March 2014. I realized that I could illustrate a new interpretation of Hayek's liberal economic thought in terms of the history of Austrian schools. Thus, I believe my fulfillment of my research plan surpassed my expectations.

研究分野：経済思想・アメリカ研究・情報社会論

キーワード：ハイエク オーストリア学派 オープンガバメント 自由主義 ネオリベラリズム 国際情報交換 アメリカ オーストリア

1. 研究開始当初の背景

これまで、アメリカを対象とする経済思想史においては、先行研究(久保[1988], 田中[2002], 高[2004])が示すように、新古典派、歴史学派、制度学派といった学派が主流であったため、オーストリア学派の経済学は、極めて少数派の扱いに留まってきた。

コーザー[1984(1988)]の知識社会学的研究は、米国に渡ったユダヤ系学者全体に注目しているが、定量的分析が主であり、経済学については簡便な記述に留まる。

一方で、オーストリア学派の通史的研究の Cubeddu[1993], Vaughn [1996], 越後[2003], 尾近・橋本[2003]においては、1970年代以降隆盛する「現代オーストリア学派」の歴史的源流が、主にミーゼスとハイエクにあるとされ、主流派経済学の集団のなかで活躍の場を得ていくマハループやハーバラーとの関係は、必ずしも十分な検討されていない。

それゆえ、かれらが移民してきた直後からどのような過程を経て現代オーストリア学派へと発展するのか、その過程に関する考察はあまり見られない。

現代オーストリア学派を扱う研究には、1970年代以降の I.カーズナーや J.オドリスコルなどの最近の世代を扱うことが多く、第二次世界大戦直後を扱った歴史研究はあまり見られない。このように、戦中戦後と70年代以降のオーストリア学派の史的な研究との間にはへだたりがある。

研究代表者が2007年に提出した博士論文までの研究は、ハイエクの経済思想を内在的に探求するものであった。しかし、2008年以降、アメリカにおける新自由主義とハイエク思想に関する論考を書いたことをきっかけに、戦後のアメリカにおける経済学もしくは経済思想の発展過程に強い関心を抱いてきた。

それゆえ、1970年代以降のアメリカにおける現代オーストリア学派の隆盛の歴史について関心を持ち、ハイエクやマハループの活躍と1970年代以降の「現代オーストリア学派」とを関連付けて、その史的な展開を研究するという着想を得た。

Coser, L.[1984] *Refugee Scholars in America: Their Impact and Their Experiences*, Yale University Press. (荒川幾男訳『亡命知識人とアメリカ—その影響とその経験』, 岩波書店, 1988年)。

Cubeddu, R.[1993] *The Philosophy of the Austrian School*, Routledge. 越後和典[2003]『新オーストリア学派の思想と理論』, ミネルヴァ書房。

橋本努・尾近裕幸[2003]『オーストリア学派の経済学—体系的序説—』, 日本経済評論社。

□Vaughn, K.[1994] *Austrian Economics in America: the Migration of a Tradition*, Cambridge University Press.

(渡部茂訳, カレン・ヴォーン『オーストリア

学派の経済学—アメリカにおける発展』, 2000年)。

久保芳和[1988], 『アメリカ経済学の歴史』, 啓文社。

田中敏弘[2002], 『アメリカ経済思想—建国期から現代まで』, 名古屋大学出版会。

高哲男[2004], 『現代アメリカ経済思想の起源—プラグマティズムと制度経済学』, 名古屋大学出版会。

2. 研究の目的

1. で述べた事情を背景として、本研究計画の目的を大きく次の二つに設定した。ひとつは、ハイエクとマハループの経済学方法論および経済思想の比較検討から両者の特徴を明らかにすること、そしてもうひとつは、第二次世界大戦後のアメリカで、「現代オーストリア学派」と呼ばれる知的集団が勃興した過程を闡明することにある。

戦中から戦後にかけてヨーロッパからアメリカに移住した多数の研究者がアメリカの経済思想に与えた影響を比較検討し、さらにアメリカにもたらした影響を検討することで、現代オーストリア学派の史的発展の過程を明らかにする。

3. 研究の方法

上記課題に取り組む方法としては、戦中から戦後にかけての移民した経済学者のなかで、1)「現代オーストリア学派」とそこに属さなかった集団との特徴を描き出し異同を明らかにすること。2)かれらの総合的・総体的な通史を描き出すことで、アメリカ経済学およびオーストリア学派の歴史のなかで、その時代の経済学者たちの活動に適切な位置付けを与えること、の二点を必要とすると考えた。

そこで、本計画を実行する具体的な方法は、まず計画の一年目を資料収集と位置付け、ハイエクとマハループの個人的な交流から、かれらの経済学方法論および経済思想の特徴付けを進めた。

計画の二年目は国内外研究者との議論および成果公開に充て、海外での調査およびセミナー参加を通して成果公開に向けた彫琢を目指した。

計画の三年目は成果公開およびそののちのフィードバックを積極的に得るため、それまでに公表した論文・著書をもとに、国際・国内の学会や研究会での議論の彫琢に努めた。

以下に、詳細を述べる。

平成24年度

<資料収集と予備的考察>

ハイエクとマハループの経済学方法論と経済思想を比較し、論文へとまとめた。かれらの交流の実際をあきらかにするため、実行に当たってはスタンフォード大学フーバー

研究所所蔵のハイエク・ペーパーズを調査し、その資料を活用した。

こうした調査をもとにハイエクやマハループの経済学方法論および経済思想を比較考察するなかで、かれらのオーストリア学派における独自性が浮き彫りになった。ここでの考察をもとに、論文および著書の執筆を進めた。

平成 25 年度

<学会報告と論文・著書執筆>

国内外の研究者と議論や共同研究を進めるとともに、研究へのアドバイスを求め、研究の深化を目指した。

具体的には、(1)アメリカ・スタンフォード大学での現地調査をもとに、同大口バート・リーソン氏との研究打ち合わせを行い、研究の進展について指導を仰いだ。この成果として、計画終了後に海外で刊行予定の英文論文集に拙稿が収録される予定である。

また、(2)「現代の経済思想」研究会や「ハイエクを読む」研究会などへの多様な研究アプローチを持った参加者が集う会へと参画したことで、自らの研究を多角的な観点から見直し、洗練させることができたと考えられる。これらの研究会への出席を通じて準備された論文は、最終年度での成果として著書へと結実した。

平成 26 年度

<成果の収穫と公表>

これまでの考察の成果とそのためにより収集した資料をもとに、最終的な成果公表およびそれをもとにした議論の彫琢を目指した。

アメリカに渡った多くのドイツ語圏経済学者は、交流を持ち互いに影響し合いながらアメリカで活動をしていた。かれらの一部は、アメリカの学界においても主導的な立場を獲得し主流派と合流した者もいた。例えば、ノーベル賞経済学部門を受賞した G. スティグラーズや、アメリカ経済学会会長を勤めた F. マハループらである。その一方で、アメリカにおいて終始少数派にとどまり、現代オーストリア学派という異端派が登場するきっかけとなったのが、L. ミーゼスや F. ハイエクの存在である。

同様の出自を持つ経済学者たちが、人的に交流しつつ、かれらの方法論および思想を築きあげるなかで交流し、最終的に、現代オーストリア学派という知的なネットワークをアメリカで形成するに至る過程を部分的に解明した。

4. 研究成果

平成 24 年度

ハイエクのアメリカにおける普及に大きな役割を果たした『隷属への道』について検討し、ハイエクを中心としたオーストリア学派の経済思想の自由主義的特質を明らかに

した。

こうした成果のひとつとして、学会報告を行い、それをもとに論文「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』: 思想の受容・普及プロセスからのアプローチ」を完成させ、査読プロセスを経て、経済学史学会の学術雑誌である『経済学史研究』に掲載された。この成果は、研究代表者の掲げた達成目標のひとつであった。

また、現代オーストリア学派の代表的論客であるハイエクと、当時交流を持っていたカール・ポパーとの個人的な影響関係に注目し、これを明らかにした。そこでの考察を、日本ポパー哲学研究会にて報告し、そののちに論文として公開した。

この 24 年度は、関東方面で行われたいくつかの学会や研究会(進化経済学会、日本ポパー研究会、『ハイエクを読む』研究会など多数)に参加し、論文公表や議論の機会を得たことが特筆すべき成果である。これにより、研究成果の発表の準備とすることができた。

これらの学会・研究会は、申請者の研究計画と密接した研究領域の研究者が集う場であり、フィードバックを得るには格好の機会であった。ここで得たアイデアやコメントなどは、随時論文に反映させることができたと同時に、次年度以降執筆する論文の貴重な教唆も得た。

また、当該計画に関連するハイエクおよび現代オーストリア学派関連の書籍や研究の進展に必要な消耗品を購入し、本計画の遂行に必要な研究資料の収集を行った。これにより、25・26 年度も使用する資料、書籍を早くから利用することができ、より広範な知識の収集と論文の執筆へ役立てることが可能となっている。

ここで、研究が思った以上に早く成果公開できるという目処が立ったため、次年度以降に割り振っていた研究費を前倒して使用した。この決定は、以降の速やかな成果獲得へと結びついたため、基金化の恩恵を受けたたいへんに有益な制度であったと考えられる。

平成 25 年度

まず、戦後の現代オーストリア学派の経済学方法論の特色を描き出し、かれらがアメリカにもたらした影響について包括的な把握を試みるという計画について、経済思想の面からの考察と共に進めた。

とりわけ、アメリカにもたらされたヨーロッパ由来の経済学方法論と経済思想の関係を、ウィーンに出自を持つ実証主義的な経済学方法論と、その批判から生まれた方法論との二つのモーメント、およびイギリスのリベラルとアメリカにおけるリベラルの意味合いの差異に着目した。

この年度においても、関東方面で行われたいくつかの学会や研究会(進化経済学会、日本ポパー研究会、『ハイエクを読む』研究会など多数)に参加し、論文公表や議論の機会

を得た。

そして、最も大きな成果として、単著（吉野裕介『ハイエクの経済思想-自由な社会の未来像』、勁草書房、336頁、平成26年3月）を刊行できたことは、本研究計画の最大の成果であった。

ここでは、引き続き当該計画に関連するハイエクおよび現代オーストリア学派関連の書籍や研究の進展に必要な消耗品を購入し、本計画の遂行に必要な研究資料の収集を行った。

こうしたことから、この段階での研究計画の進展は、当初研究目的に記した計画のみならず、さらなる発展を含むため、計画が順調に進展していると評価した。

平成26年度

この年度におけるもっとも顕著な成果は、平成26年3月の単著『ハイエクの経済思想：自由な社会の未来像』（勁草書房）刊行と、それを受けての議論の彫琢である。

同書で論じた内容によれば、ハイエクの代表的著作『隷属への道』のヒットを通じて、イギリス由来の自由主義が戦後のアメリカで保守思想に変容し、かれの意図とは反対に、リベラル思想の大衆化を促す契機となった。

またハイエクは、個人の自由だけでなく社会制度としての秩序も重視しており、そのことは共有知識やルールの進化に市場経済の存立基盤を見出すことで示されている。

このようなハイエク解釈は、かれの自由主義を現在の「ネオリベ」の源流として捉えるのではなく、同時代の欧米の自由主義やリベラルと対比させることで可能となった。

さらに、ハイエクにおける「自由」とマハループにおける「自由」は、後者がよりアメリカにおける積極的な自由として洗練させたという意味において違いが見出される。一方で、ハイエクの考える自由はイギリス由来の強制的排除にとどまるものであることを指摘した。

同書では、最終的に発展的な考察として、「知識の豊かさ」を目指す「開かれた政府」という政府観を論じた。これにより、新自由主義か福祉国家かという前世紀の対立軸とは違う社会像の提示を試みた。

このような一連の考察と、同様の関心を持つ研究者との議論を通じて、アーカイブワークに基づいた従来の経済思想史の研究手法を基礎としつつ、思想の大衆化という新しい観点から経済思想の発展を解明するというアプローチを開拓した。

以上のことから、この最終年度においても当初予想していた以上の研究成果を得られたと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

1. 吉野裕介「ハイエクの心理学と進化論—『感覚秩序』と『文化的進化』」、『第78回経済学史学会大会報告集』、経済学史学会、pp.58-63、平成26年5月、査読無。

2. 吉野裕介「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』：思想の受容・普及プロセスからのアプローチ」、『経済学史研究』、経済学史学会、Vol.55, No.1, pp.36-52、平成25年7月、査読有。

3. 吉野裕介「ハイエクにおける『新自由主義』と『福祉国家』」、『第77回経済学史学会大会報告集』、経済学史学会、pp.79-84、平成25年5月、査読無。

4. 吉野裕介「東アジアでハイエクはどう読まれてきたのか(特集 いまこそハイエクに学べ:「ハイエク全集・第11期」完結記念)」「春秋」、春秋社、vol.544, pp.1-4、平成24年12月、査読無。

5. 吉野裕介「「ハイエクにポパー的着想はあるのか?—個人的交流と学説への影響の考察から—」、『批判的合理主義研究』、日本ポパー哲学研究会、Vol.4, No.2, p.7-13、平成24年12月、査読有。

6. 吉野裕介「ハイエクにおけるポパー的着想—W.W.バートリーの貢献をめぐって—」、『批判的合理主義研究』、日本ポパー哲学研究会、Vol.4, No.1, pp.18-23、平成24年6月、査読無。

〔学会発表〕(計5件)

1. 吉野裕介「基調講演『ハイエクの経済思想』 解題—情報社会における思想と政策の関係をめぐって—」 国際公共経済学会次世代研究部会サマースクール平成26「熱海会議」、東洋大学熱海研修センター、平成26年9月。

2. 吉野裕介「ハイエクの心理学と進化論—『感覚秩序』と『文化的進化』」、セッション「ハイエク思想の深層」、組織・報告者：太子堂正称、報告者：原谷直樹、吉野裕介、討論者：鳥澤円、渡辺幹雄、第78回経済学史学会大会、立教大学、平成26年5月。

3. 吉野裕介「ハイエクにみる新自由主義と福祉国家の理念—ケインズ主義批判を手がかりに—」、ケインズ学会第3回年次大会、専修大学、平成25年12月。

4. 吉野裕介「ハイエクにおける『新自由主義』と『福祉国家』」(セッション『現代福祉国家思想の再検討』) 組織者：橋本努、報告者：吉野裕介、藤田菜々子、討論者：橋本祐子、柴山桂太、第77回経済学史学会大会、関西大

学，平成 25 年 5 月。

5. 吉野裕介「ハイエクにおけるポパー的着想—W.W.バートリーの貢献をめぐって」，日本ポパー哲学研究会，慶応義塾大学，平成 24 年 7 月。

〔図書〕(計 4 件)

1. 吉野裕介「慣習—どう生活に役立つのか」橋本努編『現代の経済思想』，勁草書房，pp.451-471，平成 26 年 10 月。

2. 吉野裕介『ハイエクの経済思想—自由な社会の未来像』，勁草書房，336 頁，平成 26 年 3 月。

3. 吉野裕介「ハイエクの心理学と進化論『感覚秩序』と『文化的進化』」，桂木隆夫編『ハイエクを読む』，ナカニシヤ出版，pp.115-141，平成 26 年 3 月。

4. 吉野裕介「アメリカの保守とリベラル：対立軸の起源」杉田米行編『アメリカを知るための 18 章』，大学教育出版，pp.58-66，平成 25 年 10 月。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

なし

取得状況(計 0 件)

なし

〔その他〕

・書評(計 3 件)

1. 吉野裕介「ニコラス・ワブショット著『ケインズかハイエクか』」『図書新聞』，第 3110 号 平成 25 年 05 月 18 日，p.4。

2. 吉野裕介「ラニー・エーベンシュタイン『フリードリヒ・ハイエク』」『週刊読書人』，10 月 19 日号，p.8，平成 24 年 10 月。

3. 吉野裕介「楠茂樹『ハイエク主義の企業の社会的責任論』」『経済学史研究』，経済学史学会，Vol.53, No.1, pp.128-9，平成 24 年 7 月。

・ホームページ

<http://researchmap.jp/read0132758/>

・受賞

1. 第 12 回経済学史学会研究奨励賞(平成 27 年 5 月 30 日，著作『ハイエクの経済思想：自由な社会の未来像』(2014)に対して)

2. 第三回名古屋大学水田賞(平成 27 年 3 月 10 日，研究課題「フリードリヒ・ハイエク

の自由主義経済思想」に対して)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉野 裕介 (YOSHINO, Yusuke)

中京大学・経済学部・講師

研究者番号：00611302

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし